

チャドル拾遺

須 永 梅 尾

On Chador

by

Umeo Sunaga

I

チャドルとは、ペルシアにおけるムスリム女性が人前に出る時に着る、頭からすっぽりと全身を包む長い黒色のヴェールを兼ねた一種のマントのことである。今日でもイランの女性は、黒や白のチャドルを着ており、中には小柄な花模様で飾った美しいチャドルも見かける。

このような覆面長衣の服型を、アラビア語でアバーヤ（正しい発音ではアバーア）、またはジルバーブと呼んでおり、ともするとイスラム教圏の女性すべてのファッションであるかのように思われがちであるが、これはおもに砂嵐と太陽の熱風から身体を保護する砂漠の民の衣服であって、砂漠地帯を中心とする乾燥気候のイスラム教圏に広く見られるものであるが、それ以外のイスラム教圏では、必ずしも一般化したものということとは出来ない。しかもこれはイスラム教誕生以前からアラビアの遊牧民の一部で、既に用いられていたともいわれ、もともと性別とは無関係に用いられていたらしいが、イスラム教成立後、かなり早い時期（メディナ期）から、クルアーンやハディース（伝承）に基くウラマー（学者）たちの宗教的判断に従い、特に上層階級における成人女性から、この着用慣習は始まったと考えられている。これをペルシア語ではチャドル（cadr）と呼んでいるのである。

チャドルという語は、もとはサンスクリット語のチャトラ（cattra）に由来するといわれる。チャトラは、普通、覆うもの、^{かさ}蓋、日傘等を意味するが、語根は cad で、覆う、隠す、護る等の意を示す単純動詞から出ている。このチャドルという語に関する新たな知見は、近年における K. H. Menges らを中心とする言語学者の一連の研究で、かなり広い地域にわたって同一対応語の音韻変異（variant）が見られることが指摘されている。それによれば、女性のヴェールを意味したペルシア語のチャドル、あるいはチャダル（cadar）を借用して出来たトルコ語のチャティル（catyr）が、さらに天幕（tent）の意味をもつ語となったこと、そしてペルシア語のチャドルが、そのトルコ語の影響を受けて天幕の意味をもつに到ったことが知られる。この点、ヴェールを意味するアラビア語のヘジャーブが顔を隠すヴェールという意味だけではなく、もともとクルアーン第33章53節に記されているように、女性が他人に会う際に仕切り部屋に垂らすカーテン（帳）の如きものであったらしいこととも考え合わせて見る必要があるが、それは今後の課題の一つとしてひとまず保留しておきたい。

そこで本稿では、同じ遊牧民であるトルコ系民族と並んで、さらに東北に広く分布するモンゴル系、ツングース系民族の諸言語に見出されるチャドルという語の対応語音韻変異の軌跡を辿ることによって、ヴェール（覆面）から天幕、さらに家屋への語義変移の経緯を探って見たいと考える。

新潟青陵女子短期大学研究報告 第17号（1987）

II

モンゴル語でこのチャドルの語形に繋がる語は *cacir* であるが、「モンゴル秘史」⁽²⁾(原名 *Monghol-un Niuca Tobca'an*, 以下秘史と略記)の275節に唯一回出てくる。秘史は12・13世紀の交におけるモンゴル勃興期のチンギス・カンの生涯を中心に、モンゴル帝国成立の歴史を物語る歴史文学で、モンゴル史研究における根本史料とされる。一般にはその漢字音訳本(特に明訳本)である「元朝秘史」の名で流伝されてきたもので、モンゴル語の原典と称されるものは、今日手にすることは出来ない。⁽³⁾

そこに出てくる原文に、*yeke cacir bosqaju* (大きな天幕を用意して……) とある。この場合の *cacir* は天幕で、中国語でいえば帳 (*chang*) と訳されるべきであろう。またモンゴル語にもともと存在して、*cacir* に類似した語に *ger* (柳) がある。これは柳の枝で枠組を造り、フェルトで囲りや内部を覆い、冬の寒さに備えるモンゴル族に典型的な天幕家屋のことで、現実にはモンゴル族のみでなく、北方ユーラシア、草原ステップに広く分布する家屋の形態である。中国語で穹廬または包 (バオ)、キルギス語でキイズ・ウィ、ロシア語でユールタ、あるいはキビトカと呼ばれるもので、秘史では家 (*chia*)、房主 (*fang-tzu*) と漢訳されている。明初、宋濂⁽⁴⁾らによって2年程で完成された「元史」によると、1352年、ジャニ・ベグ (*jani-beg*) が大きな *saqlet*、つまり *cacir* を大汗に提供したという記事がある。この *saqlet* は天幕を意味する *cacir* 以外のもう一つの語であるということが出来る。ペリオ (P. Pelliot) はこの *saqlet*、または *saqirlot* は、スカーレット色をしたウール布を指しているといっているが、これは *cacir* がどんな色の材料で出来ているかを示唆している点で参考になる。また明代の女真語で、*jacir(i)* と綴る語があるが、これは *caciri* と読むべきもので、*cacir* の一変異であることは疑いない。⁽⁵⁾

cacir なる語は、また秘史の系統をひく17世紀中葉のモンゴル史書といわれる *Altan Tobci* ⁽⁷⁾ では、次の文中に1回出てくる。

Muqaliqai-ong qou-a morin-iyen unuja qubaqai tarbaghanan daquban emüscüi, künggüi jabaqan-du altaghanabar cacir barju noyitan nekey-yi künesülejü qataju kebtejü qoyin-a ükebe gekü.

これをバウデン (C. R. Bawden) は以下のように訳した。「黒馬に乗って、乾いたタルバガン (モルモットに似た齧歯目⁽⁶⁾の一種) の皮で出来たジャケットを着たムカリ王 (*Muqaliqai-ong*) は、クングイ・ジャバカンという場所で、粗末な天幕家屋 (*cacir*) を建て、湿った羊の毛皮を食糧にした。衰弱した彼は、それを下に敷いて、やがてのちに死んだ」と。この箇所⁽⁸⁾の文は、ムカリ王が、自分が絶望的な状況にあることを認め、柳の若枝の一時凌ぎの小屋を建て、古くなった乾した毛皮を着、水で軟かくした毛皮以外に、口にするものは何一つとして持たなかった有様を叙している訳である。ところが、アルタン・トブチと同様、秘史の系統をひく「蒙古源流」(*Qad-un ündüsün-ü erdeni-yin Tobci*) ⁽⁹⁾ では、たといムカリ王の生涯の悲惨な終焉について記してはいても、不思議にも彼の住んだ天幕家屋 (*cacir*) のことについては一言も触れていない。

また別のモンゴル語史料、*Mongol Borjigid obogh-un teük*, ⁽¹⁰⁾ のムカリ王生涯の要約の記述にも、そのことは言及されていない。そこには次のように書かれている。

Muuliqai ong ghaghacaghar burughulju küküi abaq-a jabai-dur kürüged dobo kijü saghusan-i ünebolod erijü barighad alaba.

「*Muuliqai ong* (ムカリ王) は、一人で何もかもを跳び越え、*künggüi jabaqan* という処に到着してから、住むべきところの丘 (*dobo*) を築いた。そこは *Ünebold* が彼を見つけて捕え、殺害した場所であった」と訳すことが出来る。(因みに、このムカリという人物について説明しておきた

い。正式には *Muqali · qaiong* で、漢名では「秘史」「元史」などに木華黎、模合理と記されている。彼はチャアト・ジャライル族出身の大功臣で、左翼の万戸長となつて、チンギス・カン支配下の千戸軍団を統轄し、四大宿老の一人となつた。チンギス・カンの西征に赴くに当っては、特に国王 (*qaiong*) という称号が与えられ、金国討滅の全権を握り、「樞皇帝摩喉国王」と称し、満州及び黄河以北の地を奪ったが、1223年、チンギス・カンの帰還以前に、転戦半ばで死去した。数え年54歳であつた。)

ここでは、*cacir* (天幕、または天幕家屋) に代つて *dobo* (丘) になっている点が注意をひく。これは何かの間違いでそうなつたのであろうか。一体誰が *dobo* と *cacir* とを入れ換えたのだらうか。あるいは記述者の誤解から生じたことなのだらうか。それとも、むしろ *dobo* は丘、丘陵を意味するとともに、天幕小屋の意味をもっていたのかもしれないと素直に理解した方がよいのであろうか。もしそういう見方からすれば、*Mongol Borjigid obogh-un teük* (p. 113) に簡潔に記されている「マウリ (ムカリのこと) は、クン・ヘイ・チャ・ブ・カンの奥にある山々を越えた。そこはウネボルドが彼を見つけて殺害するまで、(ムカリが) 生きようとして避難所を造ろうと、芦の茎を束ねて結んだ場所である」という文は、そうした見方を裏付けてくれるように思える。もしもこうした見方が成り立つとするならば、さきに挙げた秘史、元史からの引用文中の *cacir* は天幕、家屋を意味する語ではあつても、*ger* と呼ばれるモンゴル人の伝統的な円形天幕家屋とは何処か異なるところがあつたのではないかと考えて見る必要があるであらう。

確かに満州・モンゴル語々彙集である *Manjū ügen-ü töli biciq* (1717年) には、*cacir* が新たな綴りとして、*cacar* となつて、以下のように記載されている。

nirughu baghan-a üiledcū bös-iyer waadang hijü dörben eteged-i degesüber tatan tulghagh-ur-iyar tul-un bariqui-yi inu cacar kememüi.

「棟と柱と綿製の覆い布と、あるいはビケット (杭) に結ばれた綱で、四隅に引張られて出来ている構造、それを *cacar* と呼ぶ」。さらにそれに続いた頁 (117a) にも、以下の如き記述が見出される。

cacar-un dörben taladur tughurgh-a bui-yi inu cacar ger kememüi.

「*cacar* が、四隅から成る直立した壁面をもつものを *cacar ger* (天幕家屋) と呼ぶ」。

(注、傍点は筆者)

以上の二つの引用文が意味するものは、前者の *cacar* はその形が単純で、地上に全方向に向つて屋根が流れるように下降するなだらかな傾斜をもつ四隅から成っているものであるのに対して、*cacar ger* は四隅から側壁面が大地に対して直立し、四角い家のようになつていて、*cacar* よりもっと高かつたに相違ない。そこでこれを前者の *cacar* と比較して考える時に参考になるのは、中国語の *pu liang-p'êng* (布涼棚、涼棚は日除けのこと) という語であらうと思う。これは満州語辞典である「五体清文鑑」(*wu-t'i ch'ing-wen chien*)⁽¹⁾ 中にある語で、確かに *cacar ger* の訳語に相当するものであろう。その338頁と、*Mongol Xelnü Tovc Tailbar* (Ulaan Baator, 1966, p. 786) に、棟を *cacar-un nirughu*、柱を *cacar-un baghana*、そして側壁面を支えるビケット (杭) を *cacar-un tulghaghun* と呼んでいることも、その構造的特徴を理解するための傍証となるであらう。これら文中で、特徴的な点として気づくのは、四隅から壁面が成り立っていることで、平面がゲルでは真円に近い円形であるのに対して、*cacar* は方形に略々近いということである。その *cacar* にしても、*cacar ger* にしても、形態上の特徴に多少の相違はあつても、全体的には丘陵 (*dobo*) のように盛り上つて見えた訳で、さきに一寸触れたように、丘を意味する *dobo* が、同時に天幕家屋をも意味していたのかもしれないと素直に理解した方がよいであらうと述べたことは、必ずしも筆者の牽強附会に過ぎた解釈とはいえないと思う。この天幕家屋が *dobo* (丘) のイメージと重ね合わされた

理由の一つとして、筆者は現在のところ、ステップの地平に見える *cacar* の形姿が、恰も小丘陵の形に似ていることから連想されたためではないかと推定している。

また最近のものとはいいい難いが、ハイシツヒ (W・Heissig) は、その著作、*Geschichte der Mongolischen Literatur*, Wiesbaden, 1972, pp. 870 で、革命以前におけるあるモンゴル文学作品の文中の一節を引用している。それによれば、*cacar mayiqan cirig-ün küriye*。「布のテントで張り廻らされている軍営」とあって、この文中の *cacar mayiqan* は布製のテントという意味であるから、この *cacar* が最近まで実際に使われていた一証拠として挙げる事が出来るであろう。

以上のように、モンゴル語の *cacir* が天幕から家屋へと意味内容を微妙に変化させてきた経緯と、18世紀以降、*cacir* から *cacar* へと綴りが変異してきたことを眺めてきたのであるが、この *cacir* がトルコ語の *catir* からの借用語であったことを、ここで改めて確認しておきたい。トルコ人のマフムード・カシュガーリの中世トルコ語辞典によれば、*catyr* (*catir*) は天幕のことであり、これは大方の受容するところとなっている⁽¹²⁾。またトルコ語コマン方言や明代の高昌(トゥルファン)のウイグル語にも同形の例証が認められる。

Ⅲ

前章で見てきた通り、*cacir* はモンゴル語の近代での史料や辞典類では、殆んど *cacar* と綴られるようになった。モンゴル語のハルハ (Khalkha) 方言では、*cacir* の *i* が *a* に変じ、*c* (*i* より他の母音の前の) が *ts* へと展開した時、*cacir* は *tsatsar* となった。これは例えば、*ajirgha* (種馬) が、ハルハ方言の *adzargha* へと展開した形と比較して見るとよいだろう。ハルムク (*Khalmuk*) 方言では第2シラブルの口蓋音は保たれたまま、*cacir* は *t̪at̪ɪr*, *tsāt̪ɪr* へと展開している⁽¹³⁾。またセレミソフ (Ceremisov) のブリヤート方言辞典でもオルドス方言辞典でも、*cacir* の形を確かめることは出来ない。ところが18世紀半ば頃から、オルドスの地図に、*jacir* という名の地名が記載されている。N. Poppe の意見では、これは *cacir* の一変異に過ぎないとされた。実際、オルドス方言やチャハル方言では、2つの強い無声子音が、第1と第2のシラブル(相互間に短い母音を伴う)の中で、互いに従属しあっている場合、最初の無声子音は弱くなる。例えば *cacir* は *jacir* に、*qosighun* (旗) は *ghuʃ(n)* にという風なのである。つまり *jacir* は *cacir* から変異したということ、さらに詳しく追求して見ると、オルドス地図上に、*cacir tologhai* (*cacir* の丘) というもう一つの地名の中にも現れている事実に出会うのである。すなわち *jacir* は *cacir* の口語形の標準的綴りであることを反映しているわけである。同じ名は外モンゴルの *jasaghtu* 地域でも見出すことが出来る。このように *cacir* (*jacir*) から *cacar* に至るまで、この語はその他の幾多の地名にもさらに現われている。例えば *cacartai-yin usun-u obogh-a*。「*cacar* のある土地を流れる河の石塚」とか、*cacartu usun-u jegün qoyitu obogh-a*。「*cacar* のある河の北東側の岸にある石塚」とあるような、呼び方の地名がその一例といえるであろう。⁽¹⁴⁾

さて、第Ⅱ章でツングース語の女真語形の *jacir* (*i*) について、一寸触れておいたが、この場合イニシャルの *j-* は、*c* から変異したものであるが、グルーベ (W. Grube) のいうように、この語の綴りは近代における南モンゴルの発展途上ではじまったと考えるべき根拠を何処にも見出すことは出来ないとするれば、それより以前の何時頃に溯って考えるべきか、今のところ不明といわざるをえない。この *jacir* (*i*) について、我われはハルハ方言や多くのモンゴル語史料にみられる如く、第2シラブルに *-a-* をもった満州語 *cacari* を知っている。G. Doerfer は、*cacari* は女真語の *cacir* (*i*) より古い形のものとして信じているが、これを信じる訳にはいかない。女真語 *caciri* は少くともモンゴル語が、まだ *cacir* の語形を使用していた明代初期以降のものと考えられるからで

ある。女真語と満州語とにおける語尾の *-i* に関連していえば、ウラディミルツォフ (Vladimir-tsov) は *-i* を伴った *cacari* という語形は、モンゴル語にも存在したとして、それを些さかも疑おうとしなかった。それは彼が何らその証拠をあえて挙げようとしなかったことから察することが出来るであろう。彼はオルドス方言の *caciri* の影響として、この語尾に付した *i* の字を説明している。しかし最近までの研究から知る限り、モンゴル語には *caciri* という語形は存在しないことが分った。ウラディミルツォフの *Slavinitel'naya Grammatika* のなかで、アントワーヌ・モスタールト (A. Mostaert) 師も、オルドス方言で他の幾つかの語が語尾に *i* を伴う変異形を示すのを知らない筈はないと思われるに拘らず、何故かオルドス方言の *caciri* については言及していない。

次に、元史に *cacir* からではなく、ペルシア語の *cadr* (チャドル) から直接の音写として現われたと思われる例として、茶得児 (*ch'a-te-erh*) を特に取り上げてみたい。ただこの場合の茶得児は、チャドルそれ自体としてではなく、当時の元朝の官職名 (茶得児局, *ch'a-te-erh-chü*⁽¹⁶⁾) を意味するものとして出ているだけで、詳しい説明はない。ところが、欧陽玄 (1283—1357) の「圭齋文集」(*kuei-chai wen-chi*)⁽¹⁷⁾ の中に、それと関連のある説明が見つかった。それはマフムード・シャー (恐らく、チンギス・カン時代の大国ホラズムの君主と同一人物か) の顕彰碑文中の一部と思われる引用文にあるもので、夜黒得児 *Ye-hei-te-erh* (多分原名は *Egder* か) という色目人の子孫の一人が、この茶得児局の役人であったということが記述されている。さらにこの文の疏には *ch'a-te-erh* が天幕という意味であり、中国語で盧帳 (*lu-chang*) と訳す旨が述べられている。この訳語はのちの柯劭忞 (*k'o shao-min*, 1850—1933) の「新元史」⁽¹⁸⁾ にもそのまま継承されている。そこでも記者は、盧帳が官職のうちの一つであることを述べてはいても、どんな仕事の内容を担当したもののなのかは、明らかにしていない。

IV

以上のことをアジア大陸を東西に互って俯瞰して考えるならば、西方の *cadr*, *cadar* という語が、東方の茶得児 (*ch'a-te-erh*) にまでいわばその音韻の脈絡を連ねていたことが分る。ロシア語で女性のヴェールを意味する *cadra* はペルシア語の *cadr* から、カーテン、天幕を意味する *šatēr* も、ペルシア語の *cadur* から変異した語⁽¹⁹⁾ であった。

終りに *Mukkadimat al-adab* 語彙集の中で明らかにされたように、モンゴル語の *cacir* がトルコ語の *catyr* から元代以前のある時期から、借用した語であったこと、また *cadr* なる語が、それよりの年代にペルシア語からモンゴル語に伝えられたこと、それも直接に入った借用語であったということ、そしてその時期がペルシア語がモンゴル王朝の宮廷で採用された色目人 (西域人の総称) たちの間で、混合語 (*Lingua franca*) の一種として貢献した元代からであろうと推定しうることを、それも日常語としてではなく、一つの公式語として極く限られた範囲内で用いられていたように思われることなど、いくつかの諸問題点を指摘し、この小論の締め括りとしたい。

(注)

- (1) K. H. Menges ; Glossar zu den Volkskundlichen Texten aus Ost-Türkistan. II, Akad. der Wissen. u. Lit., 1954, Nr. 14, p. 707
K. H. Menges ; The Oriental Elements in the Vocabulary of the Oldest Russian Epos, the Igor' Tale. Supp. to Word, New York, 1951, p. 72, n. 188
Serruys. Henry ; Cacir, Cacar, Cadr "Tent" in Mongol, ZAS, 17, 1984, p. 76—81
- (2) 那珂通世「成吉思汗実録」新版. 筑摩書房, 1943年.

- 村上正二訳注「モンゴル秘史」全3巻, 東洋文庫(平凡社), 1970年一。
 Mongghol Borjigid obogh-un teük by Lomi, edited by W. Heissig and C. R. Bawden, Wiesbaden, 1957
- (3) 村上正二訳注, 前掲書 はしがきより
- (4) 元史, 台北, 卷43.
 (Yüan-shih (po-na pen) 43. 6a, Taipei, ed., 1966, p. 356 b.)
- (5) P. Pelliot : Notes on Marco Polo II. Paris, 1962, p. 640
- (6) W. Grube ; Sprache und Schrift der Jučen, 1896, repr. Peking, 1941, p. 12
- (7) C. R. Bawden ; Mongolian chronicle Altan Tobci, Wiesbaden, 1966.
- (8) C. R. Bawden ; ibid. pp. 88, 178.
- (9) Erdeni-yin Tobci ; Mongolian chronicle by Saghang Secen. Scripta Mongolica II, Cambridge, Mass., 1956.
- (10) Mongghol Borjigid obogh-un teük by Lomi, p. 67
- (11) 五体清文鑑, 北京.
 (Wu-t'i ch'ing-wen chien, Peking, 1957, II, p. 3387)
 Y. Tsevel ; Mongol Xelnü Tovc Tailbar, Ulaan Baater, 1966, p. 786
- (12) C. Brockelmann ; Mitteltürkischer Wortschatz nach Mahmud al-Kasgharis Divan Lughat at-Türk. Bibliotheca Hungarica I, Budapest, 1928, p. 51.
 K. Grönbech ; Komanisches Wörterbuch, Kopenhagen, 1942, p. 74.
- (13) G. J. Ramstedt ; Kalmückisches Wörterbuch, Helsinki, 1935, pp. 438—439.
- (14) Magadbürin Haltod ; Mongolische Ortsnamen, Wiesbaden, 1966, p. 40 a.
- (15) E. Hauer ; Handwörterbuch der Mandschusprache, 1952—1955, p. 132.
 J. Norman ; A Concise Manchu-English Lexicon, Seattle & London, 1978, p. 40.
 B. Y. Vladimirtsov ; Sravnitel'naya Grammatika Mongol'skogo pis'mennogo Yazyka i Xalxaskogo Nareciya, Leningrad, 1929, p. 343.
- (16) Yüan-shih, 85. 34 a, Taipei ed., p. 813 b.
- (17) 圭齋文集(四庫叢刊, 222), 卷9, 50頁
- (18) 新元史, 天津, 卷55, 卷151.
 (Hsin Yüan-Shih, T'ien-chin, 1922, 55 · 25 a, 151 · 4 a.)
- (19) N. Poppe ; Studies of Turkic Loan Words in Russian, CAJ. 20, 1976, p. 228.
- (20) N. Poppe ; Mongol'skii Slovar' Mukaddimat al-Adab, Akad. Nauk, Moskva-Leningrad, 1938, pp. 129 b—130 a.